『略論安楽浄土義』の性格について

――「十念」の問題を中心として――

原田哲了

はじめに

『略論安楽浄土義』という書は、著者の問題等の素性が今ひとつはっきりしない点があり、また親鸞が引用しないということもあって、浄土教理史の中でもあまり積極的な評価を与えられたものとは言い難い。しかし道綽『安楽集』に多く引用され、間接的にその後の浄土教の流れにおいても意味を持つ書なのである。

また何よりも「十念」という浄土教上の重要概念が見られるのであり、その意味でも軽視できるものではない。

「十念」については先学の様々な研究がすでに存在しているが、本書に焦点を当てたものが、それほど多いということでもないので、今回はこの「十念」の問題を取り上げつつ『略論安楽浄土義』という書の持つ性格・意義について考察してみようとするものである。

なお、著者の問題は決定的資料が見出されない限り推定の域を出ないという側面があるので、曇鸞についての考察も行ってはいるが、今回はその判断をしてはいないことをお断りしておく。

一

まず簡単にではあるが『略論安楽浄土義』（以下『略論』）という書について触れておく。この書が曇鸞によるものであるかは、常に問題となるところである。その主な理由は、我が国の江戸時代における、著者非曇鸞説に関する論争にあると思うが、敦煌写本とされるものが紹介されるに及んで、状況は一変するのである。

その敦煌写本とは以下の二本である。

①スタイン本（大英博物館蔵）…スタイン蒐集によるものであり、大正初期に渡英した矢吹慶輝により写真資料として我が国にもたらされた。これら矢吹招来になる敦煌資料は岩波書店によりまとめられ、昭和五年『鳴沙餘韻』という書名で出版された。なお最初の論文は大正六年に発表されている。『讃阿弥陀佛偈』（欠損有り）に続く形で書写されており、その初めに「略論安楽土義」と記され、尾題として「讃阿弥陀佛幷論上巻」と記されている。さらに「景雲二年三月十九日弟子張万及寫」の識語がある。景雲二年は唐代の年号であり、西暦七一一年で、曇鸞の没後百五・六十年後にあたる。

②龍谷大学本（龍谷大学図書館蔵）…禿氏祐祥が書体等から唐初（唐の成立は六一八年）のものと推定する。その紹介は昭和七年になされている。それに従うならば①より古いものであることになる。①と同様『讃阿弥陀佛偈』（やはり欠損があるが、①より多くの部分が残る）に続く形で書写される。その初めにやはり「略論安楽土義」とあり、尾題として「讃阿弥陀佛幷論上巻」とある。年紀等を記した識語は無い。

上記二本は多くの点で共通しており、おおよそ同系統のものとみなすことができる。しかし、両本間にある文字

の差異等に検討すべき点がある。敦煌写本についてはその真贋も含めて、様々な問題が存在するが、例えば②本に関する禿氏の判断の是非も含めて、さらなる研究が求められるところであろう。

さらに注目すべき資料として次のものがある。

③来迎院本（大原来迎院如来蔵蔵）…来迎院は融通念仏の良忍（一〇七二～一一三二）ゆかりの寺であり、その経蔵を如来蔵と呼び、良忍の遺品等が残されている。ここに『讃阿弥陀仏偈』と『略論』の写本が残っている。両本は別巻であり、それぞれ外題に本文と別筆で「～（書名）　良忍之」とあり、良忍所蔵であったことを想像させる。『略論』の方は首尾共に「略論安楽土義」と記され、「康和二年二月四日未時敬書寫了　同月六日巳時□於大原草菴點了　桑門藥源　自他法界同利益共生極樂成佛道」の識語がある。つまり康和二年（一一〇〇）に薬源という僧が書写したものであることが知られる。ちなみに『讃阿弥陀仏偈』も同じ薬源の書写であり、こちらには康和元年の年紀がある。その内題は「□□彌陀佛偈幷論　羅什法師作」となっている。日本最古の写本であり、また別巻になっていながら二本を一具のものととらえていた形跡がある。敦煌の二本との関連性も含む重要資料であろう。

上記敦煌本二本は、共に『讃阿弥陀仏偈』の首題に当たる部分が欠損しているために撰号が明らかでない（いずれも尾題に撰号なし）。また③本では『讃阿弥陀仏偈』の方に「羅什法師作」の撰号があり、資料として残る古写本に曇鸞作を決定づけるものがない。

但し、迦才『浄土論』に記される曇鸞伝中の「注解天親菩薩往生論。裁成両巻。法師撰集無量寿経奉讃七言偈百九十五行。幷問答一巻。」という内容を、敦煌本が裏付けることとなった（周知の通り道宣『続高僧伝』中の曇鸞伝・道綽伝には著作に関する記述に疑問がある）。『讃阿弥陀仏偈』が曇鸞のものであるとするならば、それと一

具の形である『略論』も曇鸞作であるはずである、という形で曇鸞が本書の著者であることが間接的に証明される、ということになったのである。

また上記③写本や、我が国における『安養抄』・『安養集』・『日本往生極楽記』等の記述によれば、『讃阿弥陀仏偈』あるいは『略論』が羅什作とみなされる流れがあったようであるが、その源流の一つに、元暁『遊心安楽道』（現在は元暁の作ではないとされる説が有力）あるいは『両巻無量寿経宗要』がある。そこでは「什公説言」として『略論』の「渡河の譬」が引用されるのである。

さらに、古い資料では、その書名は『略論安楽土義』（『西方指南抄』においてもそうである）あるいは『安楽土義』等とされていた（あるいは単に「問答」とされる）ようであり、「浄土義」というようになるのは後世のことである。いずれにせよこれらは『略論』研究のための基礎資料となるものではあり、またこれらの資料の出現により『讃阿弥陀仏偈』と『略論』が一具のものである可能性が高まったといえる。

なお以下の『略論』の引用は、便宜上②本を底本とする『真宗聖教全書（以下真聖全）一』所収のものを用いることとする。(1)

次に『略論』の内容構成について述べる。

『略論』はよく知られる通り九つの問答から成り立っている。しかしそれ以外の本書の構成を形作り説明するような文章がないので、やはりその問答による全体の内容構成がどのようになっているかを検討する必要があるのである。

また問答を単純に数えると九つではあるが、第五問答の中に六～八問答が現れるという形になるなど、構成の面

で考慮されなければならない点が存する。

第一問答は、「安楽国は三界のどこに摂まるか」という問いに対し、「浄土は三界を超越する」ことを、『無量寿経優婆提舎願生偈註（以下論註）』上「妙声功徳成就」でも見られる、『大智度論』の内容によって示す。そして『無量寿経』上の取意により、「法蔵発願」つまり「阿弥陀仏とその浄土の成立の根源」について触れるのである。

第二問答はそれを受け、「安楽国の荘厳に幾種あるか」の問答となる。ここに『讃』とのつながりをうかがわせる次の文が見られるのである。

若し経に依り義に據らば法蔵菩薩の四十八願は即ち是の事なり。讃を尋ねて知る可し、復た重ねて序べず。若し无量壽論に依らば、二種の清浄を以て二十九種の荘厳成就を攝す。

（真聖全一、三六七頁、書き下し筆者、以下同）

これによると、『経』によって浄土の荘厳の本質を意味するところが『讃』にも見られるとするのであり、それが法蔵菩薩の四十八の本願であるとする。そして『浄土論』によって二十九種の浄土の荘厳が明らかになるとされ、その後その荘厳について具体的に述べられていくのである。従って『経』とは『無量寿経』であり、『讃』は『無量寿経』と強く関係のあるものであるはず、ということになるのである。またこれは、『無量寿経』・『浄土論』・『讃』の三者の関係性にある示唆を与える表現内容とも言えるであろう。

第三問答は、さらにそれを受け「安楽土に生まれる者にどのような輩があり、その輩に生まれる因縁があるか」と問われる。つまり浄土に往生する機類とその行業に関するものである。そしてその答えは『無量寿経』の三輩に基づいて述べられるのである。ここでは『観無量寿経』の九品のことも述べられるが、「今無量寿経に依傍[2]して讃

を為す」（真聖全一、三六九頁）のだからこのような叙述になるとするのである。よってここでより一層『讃』との関係が明らかになり、『略論』が『無量寿経』に則って書かれたものという姿勢が鮮明になるとも言えるのである。

その後、上・中・下輩の順に答えが述べられていくのであるが、注目されるのは、中輩と下輩のところで、「又た一種の安楽に往生すれども三輩の中に入らざるもの有り。謂く疑惑心を以て功徳を修し、安楽を願生す。」（中輩中の文、真聖全一、三六九頁、下輩にも同様の表現があるが、「不異前説」という表現により簡略化されている。そしてその代わりに胎生についての文が加えられる。）と述べて、「疑惑」について触れることである。この「疑惑」の問題は下輩の「十念」の問題にも関わることであるので、詳細は後に触れることにする。

第四問答は、第三問答の下輩中の疑惑のところで述べられる『無量寿経』胎化段からの内容を受けたもので、「胎生の者はどのようになるか」についての問答であり、ほぼ『無量寿経』によるものである。

そして次の第五問答で、「疑惑心により胎生する者の疑惑とはどのようなものか」が問われるのである。その答え方は、『無量寿経』胎化段中の「五智を疑惑して信じない（不了）」というあり方について、具体的な疑惑と、それを治する仏の智慧（五智）のあり方を述べていくという形で展開する。なおこの「五智」は『無量寿経』においては胎化段に出るものである。この疑惑の一番目が「十念」に関わるものである。（後述）

また第六～八問答は、この第五問答中の第三の疑惑の中に登場するものである。第三の疑惑は「仏が一切衆生を度すということを、そのようには見えない世界のありようから疑う」というものであり、その答えとしては「三世諸仏があることを五つの義」で示すという形になっている。その中で「衆生世間の有辺無辺」・「渡と不渡」といった、いわゆる四句分別的な表現に基づく疑問がこの三つの問答になっている。その焦点は「二諦の道理」・「世間と出世間の対比」といったことに当てられており、仏のあり方と衆生のあり方に対する考察であると言える。

そして最後の第九問答は、再び前記の下輩生のところに出た「十念相続」を取り上げ、「十念相続とはどのようなものか」ということに問うものである。

以上が『略論』の概略である。その構成は、

第一問答「浄土は三界の摂か」

第二問答「浄土荘厳について」

第三問答「三輩生について（含疑惑の者）」

第四問答「疑惑による胎生について」

第五問答「疑惑について（五智による対治のあり方について）」

第六～八問答「仏の超越性と衆生の分別性によって生じる疑問」

第九問答「下輩生の十念相続について」

ということで、第二問答までが「浄土の性格について」、第三問答以降が「往生する衆生の問題について」、というものになっているのである。

このことを『讃阿弥陀仏偈』の内容構成と比較検討する必要があろう。

『讃阿弥陀仏偈』は、「西方浄土の仏（阿弥陀仏）→仏の寿命無量・光明無量（十二光）→浄土の衆生→浄土という国土」という流れで進み、讃歎と帰命の意が述べられていくものである。たださらに「龍樹菩薩への帰命」が加えられ、その後「凡夫である我への仏の摂護」を願いつつ、諸仏が同じく一如に乗じることを述べ、阿弥陀仏一仏と浄土への帰命と讃歎が、諸仏一如の智慧と慈悲へとつながり、それが十方に遍満することを願って終わるので

ある。

その中、「浄土の衆生（菩薩）」に関するところで、『無量寿経』第二十二願に相当する内容が出され（真聖全一、三五四頁）、また第十一・十八願成就文に相当する内容も見られる（真聖全一、三五六～七）。さらにいわゆる弥勒付属の文によるものと思われる内容も見られる（真聖全一、三五八頁）。強く『無量寿経』との関係性がうかがわれるものである。加えて「浄土の衆生」・「国土」についての記述中、それぞれ「本願力荘厳」を示す表現が見られるのである（真聖全一、三五七、三六〇）。

このことから『讃阿弥陀仏偈』は浄土の仏・菩薩・国土の有りようを讃え、龍樹という法の伝達者も讃え、最終的に仏法の遍満による衆生の救いを願ったものと言え、それが『無量寿経』の内容を軸に展開したものであると言うことができるのである。

『略論』において『讃』と呼ばれるものに対する注目点は、上記の通り「法蔵の本願」と「『無量寿経』によって作られた」という二点であり、この『讃』が『讃阿弥陀仏偈』を指す可能性はやはり高いと考えることができるだろう。ではこの両書の性格をどう評価するかが問題となるが、『讃阿弥陀仏偈』で讃えられる内容は、仏と浄土の真実とそのはたらきであり、それが凡夫のもとに伝わるということにおける龍樹菩薩の果たした役割も讃えられているのである。

それに対して『略論』の方は、まず浄土の本質とその仏・衆生・国土の説明をなすものであり、次いで浄土に生まれる人間の側の問題をクローズアップしたものであるといえる。これらは確かに『讃阿弥陀仏偈』の内容が前提としてあるならば、その説明として必要な問答と考えることができ、『略論』自体がより具体的内容を帯びることにより、人々に阿弥陀仏と浄土の法が展開し成立する浄土教のあり方を伝える役割を果たすことになると考えるこ

とができるのではないだろうか。

二

次に「十念」の問題を検討するに当たり、まず曇鸞の『論註』の性格とその中の「十念」の問題について検討したい。（なお紙数の関係により極めて簡単なものになることをお断りしておく。）

『論註』は当然世親『浄土論』の註解の書であるが、その冒頭には『十住毘婆沙論』「易行品」による説示が見られ、他力と難易二道について述べられる。このことにより、仏願力に乗じた易行ということが本書全体を覆う枠組みとして設定されたことになり、『論註』は阿弥陀仏とその浄土を対象とするが故に易行となる五念門を説示することを軸とした、自利利他成就の大乗菩薩道の意義を問うものとなっている。つまり阿弥陀仏の本願力を根底においた仏道の展開の成就ということが如何にして起こっているかを述べた書である。

『論註』における「十念」の問題は、三ヵ所で見られる。巻上の「八番問答」（真聖全一、三〇七頁以下）、巻下の「氷上燃火」（真聖全一、三二八頁）、「三願的証」（真聖全一、三四七頁）においてである。この内、前二者は『観無量寿経』下品下生の「十念」に関するものであり、後一者は『無量寿経』第十八願の「十念」に関するものである。

まず「三願的証」の箇所についてであるが、これは、五念門行を修し速やかに阿耨多羅三藐三菩提を得ることの増上縁が阿弥陀仏の本願にあることを、第十八・十一・二十二願の三願によって証明する中、第十八願文との関連で問題となるのである。曇鸞の説明中では「仏願力に縁るが故に、十念念仏すれば便ち往生を得ん。(3)」とあり、念仏の前提に「十念」がある形になっている。

次に「八番問答」における「十念」の問題は、廻向門解釈から派生した、浄土に生まれる衆生についての考察において、『無量寿経』十八願成就文・『観無量寿経』下品下生の矛盾を取り上げる中から生じる。しかし実際に対象とするのは『観無量寿経』下品下生の臨終の十念である。長い論旨の展開を持つ内容なので、その要点のみ述べるならば、「十念」は直接念仏を指すものではなく、念仏に付随して表されることである。そして端的に「所観の縁に随いて心に他想なくして十念相続するを名づけて十念と為す」と述べられてもいる。これによれば「十念」とは「心の相続する」あり方である。

また「氷上燃火」における「十念」も『観無量寿経』下品下生の「十念」であり、ここでは上品生の如く「無生の生」の道理を知ることのない者が、名号の功徳を聞き、その名を称えることにより「願生心」を作すことが述べられる。これは「八番問答」におけるいわゆる「三在釈」の内容に通ずるもので、そこでの「十念」の意と共通のものと見ることができよう。

このように『論註』における「十念」とは基本的に「相続する心」であり、それは念仏と密接に絡み合いながら、互いに衆生を阿弥陀仏と浄土に対して志向させるはたらきをなすものであろう。

さて、以下は『略論』の「十念」の問題についてである。この問題については岡亮二がすでに論じたことがあり[4]、さらに『論註』における「十念」に関する検討もなされている[5]。しかし岡はこれらの論考において、この「十念」の問題を根拠にして『論註』と『略論』の著者が異なるという論を展開するのである。このことの是非はともかくとして、両書の性格について考察することにおいて不可欠の問題であることは確かであるので、改めて検討しようとするものである。

『略論』における「十念」の問題は以下の三ヵ所に見られる。

①第三問答―三輩往生中の下輩の箇所（真聖全一、三六九）。→三輩段的要素による展開。

②第五問答―第三問答に見られた疑惑往生の問題について、その疑惑のあり方を明かす中（真聖全一、三七〇～一）。→阿弥陀仏を憶念しても往生できないという疑惑に関する答え。→『論註』八番問答中の表現＋種々の例え話（他力の表現）

③第九問答―十念相続とはどのようなものか（真聖全一、三七四～五）。→三輩段の下輩生に関する問題。→十念とは心の相続を表したもの。阿弥陀仏を念ずるこころの状態。称名との直接的関係は強くは表わされていない。

それでは以下に具体的に検討していくことにする。

まず①についてである。

下輩生には三の因縁有り。一には仮使ひ諸の功徳を作すこと能はざれども、当に無上菩提心を発す。二には一向に意を専らにして乃至無量寿仏を十念す。三には至誠心を以て安楽を願生す。命終の時に臨みて、夢のごとくに無量寿仏を見、亦た往生を得。功徳、智恵は次で中輩の如し。

というものであるが、これは『無量寿経』下の三輩段の内容によるものであり、上・中輩では「一向専念無量寿仏」とある念仏に関する記述が、下輩においては「一向専意乃至十念念無量寿仏」（以上真聖全一、二四～五頁）とされたことによるものである。但し『略論』のこの箇所においてはこれが「一向専意乃至十念無量寿仏」[6]となり、『経』と比較して「念」の一文字が減っていることには注意が必要である。

漢訳経典としての『無量寿経』自体においては、上・中輩の「一向に専ら仏を念じる」という内容が、下輩では

念仏の表現の前に「一向専意乃至十念」ということがあることになっている。ここでの「乃至十念」の解釈の可能性としては、「一向専意」することが十念に及ぶということか、もしくは「乃至十念」ということが「念無量寿仏」と同じ事であるか、という二通りがあるように思われる。つまり前者であれば「乃至十念」は「意を専らにする」心の状態を指し、後者であれば「乃至十念」は念仏することそのもの、ということになるだろう。後者であれば念仏の内容そのものが「乃至十念」ということであり、例えば「十回ばかり念ずること」といった意味が想定されるだろう。しかしこのような意味であれば「一向専意念無量寿仏乃至十念」といった語順の方がふさわしいように思われ、やはり「乃至十念」までは念仏の前提をなすあり方を表していると見る方が自然であろう。つまりこの「乃至十念」は、「十たび願生心を起こす」といった心のあり方に対する言及であり、同じ下輩中の「乃至一念念於彼仏」という表現の「一念」と対応している、と考えられよう。

しかし『略論』のこの箇所では、「一向専意乃至十念無量寿仏」とされたことにより、「乃至十念」が念仏するという意味になっている、ということになるのである。ここではそれが称名であるといった意は現れないが、『経』とニュアンスが変化している点として注意する必要があろう。

続いて②についてである。

この第五問答が往生に関する「疑惑」を大きく採り上げるということは、先に述べた通りであるが、それは第三問答の中・下輩の箇所に「疑惑」について述べることに起因するということも、前記の通りである。『無量寿経』の三輩段においては、「疑惑」に関する言及は下輩中の「不生疑惑」ということのみであり、「疑惑」については胎化段で採り上げられることとなる。『略論』の説相は『無量寿経』三輩段とはかなり異なり、むしろ初期無量寿経である『大阿弥陀経』・『平等覚経』に近接する。これらにおいては三輩中で、やはり中・下輩において「疑惑」

について触れるのである（それぞれ、真聖全一、一六一～四、一〇九～一二）。しかし『略論』では「不入三輩中」とあり、中・下輩のところに置かれながら「疑惑のものは三輩の中に入らない」とも言われていることになるので、三輩から出るという意味では異なってもいる。よってもちろんこのことが直ちに『略論』と初期無量寿経の影響関係を云々することにはならないが、注目すべき点であることには変わりがない。もしこのようになっていることが、『経』による影響ではないというように想定するならば、上輩と中・下輩を分ける要件である「出家かそうではないか」と言う視点が問題となろう。ここで浮かび上がるのは「出家者―在家者」という対比の可能性であろうか。

このような点を考慮に入れつつ、この問答中の疑惑の第一で見られる「十念」の問題について検討したい。

まず第五問答自体が、第三問答に見られる疑惑往生・胎生の問題について、その疑惑のあり方とはどのようなことなのかを明かす、という形で始まる。その説き方は、具体的な疑惑と、それを治する仏の智慧（第三問答に出た五智）のあり方、という形で展開するのである。

まず、疑惑とは総じて仏智（五智の一）を疑うことであるとし、後の四智が具体的な疑惑を対治する、という四つの説き方で展開する、その一番目が問題となるのである。

その疑惑の第一の内容は、「阿弥陀仏を憶念しても、必ずしも浄土に往生できないのではないか。」というものである。その疑惑の根拠とされるのが、通常で言う業の道理であり、『論註』上、八番問答にあった『業道経』によるとする表現が出されるのである（真聖全一、三〇九）。

そしてここで、八番問答の表現との関連であろうが、「十念相続」という表現が見られる。第三問答下輩中での「一向専意乃至十念」とも異なる表現である。ここでは「十念相続するを以て便ち往生することを得て畢竟じて退せず。三塗の苦と永く隔てんや。」ということが、業の道理に反するというのである。

この文脈により、ここでは疑惑を表現する中の「憶念阿弥陀仏」と「十念相続」が同じ意味で用いられていることが解るであろう。そしてこの疑惑ではさらに三界の煩悩を断じないままで「少時阿弥陀仏を念ずる」ことをもって迷いの三界を出るというのも道理に合わないということを続けて出すので、この「少時念阿弥陀仏」も「憶念阿弥陀仏」・「十念相続」と同じ事を表していると考えられるのである。

このことは、前記の第三問答中の「乃至十念」が、『無量寿経』三輩段での「心」に関する表現であったものが、『略論』ではむしろ念仏することに近づいたということと通底しているのではないだろうか。つまり「十念相続」が仏を憶念することであり、その中には少時念仏をすることも含まれているのであるから、これは念仏することなのである。

続くこの疑惑を対治することとして、不可思議智（五智の二）が出される。これは相対を超えた無量無辺の智慧のことを表しているのである。さらにこの智慧の内容を七つの譬で表して行く。そしてこの部分は後に『安楽集』第二大門「広施問答」（真聖全一、三九九頁以下）に引用されるのである。

これらの譬のうち、以下の三つは『論註』にも見られる。

譬四（劣夫と転輪王）→『論註』下、末尾（真聖全一、三四八）。他力の説明。

譬六（鴆鳥入水）→『論註』上、大義門功徳成就（真聖全一、二九七）。声聞をして無上道心を起こさしめる、本願不可思議の神力の説明。

譬七（黄鵠・子安）→『論註』上、主功徳成就（真聖全一、二九四）。安楽国を住持する仏。その住持のあり方の説明。

そして、この箇所の終わりに見られる「五不思議中、仏法最不可思議」という内容も、やはり同じ表現が、上記

の『論註』大義門功徳成就のところで見られる（真聖全一、二九八）。また、『論註』においてはもう一ヵ所で「五不可思議」について触れている。巻下、観察体相章（真聖全一、三一七）である。そこは、浄土の国土の荘厳を成就した「不可思議力」の説明をする箇所であって、そこでは仏土不可思議に二種の力があって、それは、業力（法蔵菩薩の大願業力）、正覚阿弥陀法王の善住持力、であるとする。後者は、前記曇七の所で述べた住持と同じことであり、非常に関連が強い。

これらのことから『略論』における不可思議智による対治とは、本願力他力のはたらきを指している可能性が高い。そして最後に「而るに百年の悪を以て重と為し十念念仏を疑ひて軽と為して、安楽に往生して正定聚に入ることを得ざるは、是の事然らず。」と述べるのである。この「十念念仏」という表現も具体的にどのようなことを意味するのか、曖昧なところがあるが、やはりこれも「憶念阿弥陀仏」・「十念相続」・「少時念阿弥陀仏」と同じ事を表していることになる。であれば「十念の念仏」とでもいった事になるだろうが、いずれにせよ「十念」は念仏である。但しその「念」の対象は仏でありながら、明らかに仏法力の不可思議なるはたらきを念ずることになるのである。

次に③についてである。

この第九問答の「下輩生中の十念相続とはどのようなことであるが」という問いであるが、前記第三問答の下輩中には「十念相続」という表現はない。但しその下輩中で説かれる「胎生」のことから派生する第五問答中に出るものであるから、このように問われるのである。

まず「十念相続」するとはどのようなことであるかについて譬えを出す。それは賊に追いつめられ河を背にする人物が、如何にして河を渡るかを必死に考える、その心情として表されている。このような他の事を考えず一つの

ことに集中する有様を「十念相続」とし、行者の念仏にもあてはまるものとするのである。その念ずる対象は、仏のあらゆる功徳であり、そこに他心が混じることなく心心相次いで「乃至十念」することを「十念相続」とするのである。

但し「十念相続」ということは、一見難しくないことに思えるかもしれないが、凡夫の心においては煩悩が尽きることはないのだから、普段から心を向けておくことが重要である、といった趣旨のことが述べられる。さらに、仲間同士が臨終の時に阿弥陀仏の名号を称え、その声が絶えないようにしたならば、そのことにより「十念」を成ぜしめる、ともしている。

ここでも「十念」は念仏することであるが、「十念相続」ということは明らかに「心」のあり方を示すものである。また臨終における「十念」に関しては、明確に称名念仏のことが述べられ『観無量寿経』下品下生の要素がうかがわれる。あくまで『無量寿経』によって展開している『略論』としては、この第九問答には少し特殊な要素があるということである。

以上を踏まえて、『略論』における「十念」の意味をまとめるならば、『論註』と異なって「念仏すること」という意がより明確化したものと考えられる。それは『無量寿経』の第十八願の問題としてではなく、三輩段を中心として展開するという、論旨の問題とも関係している。ここでは機類の別を作す要素が表現上の意味をもっているということであり、それが「疑惑」の問題となって現れるのである。

しかしこのことは、下輩生の方に論点が傾斜していく方向性も含んでおり、それは『観無量寿経』が浄土教の展開において重要な意味を持つようになる方向性とも連動している。それが『略論』の第九問答に若干見られる『観

経』的要素、称名念仏の要素となって表現されたのだ、と考えることもできるのではないだろうか。

小　結

『論註』が大乗菩薩道という要素を色濃く示す書であるという性格を持つことにより、菩薩と凡夫（教化者と非教化者、法の伝達者と享受者）というある種の表現上の対比がうかがわれると考えられる。その中で「五念門」と「十念」という対比が見られるのであり、「十念」には「法へ心を向ける」という方向性が不可欠のものとなるはずである。

『讃阿弥陀仏偈』には、成就文の「乃至一念」が存在し「十念」は存在しないが、本願を根源とする法の展開と伝達を讃える姿勢が見られるものと考えることができる。

『略論』では、「浄土のありよう」・「往生する衆生」について問う過程に、五念門のような明確な大乗菩薩道の枠組みはないが、疑惑する機根とそれを対治する仏の智慧という対比はある意味鮮明になっている。そういった中で「十念」が見られるのである。機類と疑惑という具体的人間の問題を基調として展開する部分が重要な意味を持っているのであり、その説相は明らかに『論註』とは異なるものがある。但し根底にある本願力ということについては三書共通に示すところがあるのである。

「十念」についての「心の相続」→「念仏」という変化傾向については、元々この両者が密接な関係を持つものとも言えるだろうから、明確にそれを区別しようとする行為自体があまり意味がないのかもしれないが（もちろん称名念仏の独立化ということを主題に考えるなら話は別であろうが）、説相の相違には重要な意味が存する。そしてこの場合その説相の変化と「十念」の意味の変化は少なからず関連していると言えるのであり、信と念仏という

実践、人間観・凡夫観といった浄土教思想の展開上、『略論』が持っていたある種の表現上の具体性という意味は決して小さくはないと考えるものである。

註

（1）『大正大蔵経』四七所収のものは、江戸時代のものを底本としており、文章に整理の跡がうかがわれる箇所があり、用いない。

（2）この部分は『真聖全一』では「依り傍へて」と訓ぜられるが、これは「たよる、信頼する（＝rely upon, depend on）」といった意味の「依傍」という一つの言葉と考えてよいであろう。

（3）親鸞加点本によれば「十念す、念仏すれば」とよみ、十念は念仏することとなるが、『論註』においては本文中にあるようによむのが妥当であろう。

（4）岡亮二「『略論安楽浄土義』の一考察―十念思想を中心として―」（龍谷大学仏教文化研究所紀要五、一九六六年）

（5）岡亮二「中国三祖の十念思想―曇鸞の十念思想―」（真宗学九四、一九九六年）

（6）ここで「乃至十念無量寿仏」をどう訓ずるかであるが、「乃至十念」がひとかたまりの動詞と考えるならばともかく、本文のごとく「乃至無量寿仏を十念す」とするのが妥当ではなかろうか。